

## 第4節 世界的なイスラーム過激派の動向と移民・難民問題 ——バグダーディー後のジハード主義

保坂 修司

### (1) バグダーディー死亡

2019年10月26日、米国はテロ組織イスラーム国（アラビア語名 al-Dawla al-Islāmīya、英語名 Islamic State: IS）の指導者アブー・バクル・バグダーディー（Abū Bakr al-Baghdādī）をシリア北部イドリブ県における潜伏先で急襲、同人を殺害した。また、米政府は、ISの公式報道官であるアブルハサン・ムハージル（Abū al-Ḥasan al-Muhājir）も別の場所で殺害したと発表した。

米国が殺害を発表してから5日後の10月31日、ISはバグダーディーおよびムハージルが殺害されたと公式に発表し、さらに新指導者としてアブー・イブラーヒーム・ハーシミー・クラシー（Abū Ibrāhīm al-Hāshimī al-Qurashī）にカリフとしての忠誠を誓ったことを明らかにした。

その後、世界各地に散らばるISの支部（ウィラーヤ（wilāya = 県や州に相当））やそれに準ずる組織もつぎつぎと新指導者に忠誠を誓った。インターネット上で確認できた順番でいうと、シナイ県（エジプトのシナイ半島）、ベンガール（バングラデシュ）、ソマリア県、パキスタン県、イエメン県ベイダー、シャーム県ハウラーン（シリア）、ホラーサーン県（アフガニスタン）、チュニジア、西アフリカ（ナイジェリア？）、シャーム県ハイル（シリア）、シャーム県ラッカ（シリア）、中央アフリカ（コンゴ民主共和国？）、シャーム県ハイル（シリア）、シャーム県ホムス（シリア）、タジキスタン、西アフリカ県（マリ、ブルキナファソ）、シャーム県バラカ（シリア）、東アジア県（フィリピン？）、シャーム県アレppo（シリア）、イラク県北バグダード、イラク県ディジュラ、リビア県バルカ、イラク県ディヤーラー、イラク県サラフッディーン、イラク県キルクーク、東アジア県（インドネシア）、アゼルバイジャンとなる。これらのうち、バングラデシュ、チュニジア、タジキスタン、アゼルバイジャンは公式にウィラーヤとは認められていない。なお、これらは、すべてISの公式のチャンネルから明らかにされたものだけである。インターネット上で、ISシンパたちが勝手に忠誠を誓ったケースは除外している。

### (2) バグダーディー殺害をめぐる疑問

この忠誠の誓いではいくつか興味深い点がある。忠誠の誓いが出たのが早かったのはシナイ半島、バングラデシュ、ソマリア、パキスタンで、中核であるイラクやシリアが最初ではなかった。とくにイラク諸県は遅れが目立つ。これらが何を意味しているかは不明で

ある。

また、公開された忠誠の誓いが静止画であった理由もわからない。公開された画像をみるかぎり、もともと静止画ではなく、動画で撮影されたのは明らかである。わざわざ静止画にしたのは、動画編集の手間を省いたためであろうか。ただし、タジキスタンにおける忠誠の誓いのみビデオで公開されている。この理由も不明である（しかも、タジキスタンのビデオのみ、屋内で撮影されている。他はすべて屋外での撮影だ）。2019年5月以降、各地域支部はバグダーディーへの忠誠の誓いを更新していたのだが、これらは原則として動画で公開されている。これとは対照的といえるだろう。

しかし、12月18日、イラク県ディジュラから動画による新指導者への忠誠の誓いがインターネット上に公開された。これは、ディジュラから公開された静止画による忠誠の誓いと同じであり、静止画は動画をキャプチャーしたものとみてまちがいないだろう。今後、随時、動画が公開されていく可能性がある。

バグダーディー殺害に関する、もう一つの疑問点は、殺害場所である。なぜ、バグダーディーはシリア北部イドリブ県の、トルコ国境とは目と鼻の先にあるバーリーシャー村付近に潜伏していたのだろうか。イドリブは反体制派の拠点だが、大半の組織が反アサドであると同時に、反ISでもある。とくにバーリーシャーは、アルカイダ系のフッラスツディーン（Hurrās al-Dīn）の拠点であった<sup>1</sup>。なぜ、バグダーディーは対立する組織の拠点に隠れていたのだろうか。

本来であれば、ISのシリア国内での最後の拠点であった、シリア東南のデイルッゾウル（ISがいうところのシャーム県ハイル）に潜伏するのが自然であろう。そのなかのブーカマルなどイラク国境付近であれば、イラク側にも逃げやすく、実際、拠点陥落後も残党は数か所に残っていたので、選択肢としては悪くなかったはずだ。

しかし、実際に彼が選択したのは、シリア西北のイドリブ県であった。なお、アブルハサン・ムハージル報道官が殺害されたのも、同じくシリア北西部、トルコとの国境近くのアレッポ県アイヌルベイダーであった。

考えられる可能性は2つある。一つは、バーリーシャー村を拠点とするフッラスツディーンのなかにISになびくものがいた可能性である。実際、2019年はじめには、フッラスツディーン中枢からメンバーに向け、ISとのコンタクトを禁止する回章が出回っていた。こうした回章が出回ること自体、フッラスツディーンのなかに、ISと接触していたものがいたことが前提になっている。もちろん、この場合、イデオロギー的に宗旨替えした可能性もあろうが、単に金銭を支払って、庇護を求めたということもありうるであろう。

もう一つの可能性は、バグダーディーが家族をトルコに逃がそうとしていた、あるいは彼自身もトルコに逃げようとしていたということである。実際、彼の親族が殺害前後にトルコで逮捕されており、この見立てもそれなりに説得力がある。また、その場合、トルコ

側にも協力者がいたと考えたほうが自然であろう。いずれにせよ、IS側の資料では、彼がイドリブに潜伏していた理由は一切明らかにされていない。

### (3) 新カリフ

バグダーディーの後継者として選出されたアブー・イブラーヒーム・ハーシミー・クラシーに関しては、名前からして偽名と考えられるが、この人物の正体についてはまったく不明である。バグダーディー殺害後の、最初の公式報道官の声明では、アブー・イブラーヒームを歴戦の闘士であり、優れた学者、指導者であると讃えているが、国籍やこれまでのISでの任務など具体的な情報は示されていない。

名前だけでみると、クライシュ族ハーシム家の出身となるが、古典的なイスラーム政治学の理論では、クライシュ族出身であることはカリフとなるための要件の一つであり、したがって、新カリフがクライシュ族を名乗ること自体は、彼の身元を探るうえではほとんど役に立たない。ISでは、アブー・バクル・バグダーディーも、彼の前任であるアブー・オマル・バグダーディー (Abū ‘Umar al-Baghdādī) も、クライシュ族出身を自称していたが、本当にクライシュ族かどうかは検証が困難だからだ。

また、新カリフを紹介した声明では、アブー・イブラーヒームは「ジハードの旗のなかの旗、学者のなかの学者、戦争指揮官のなかの指揮官」と描写され、「十字軍の米国の保護者を攻撃し、苦汁を舐めさせた」としている。ここから、おそらく彼がイラク戦争直後にシーア派政府に反対する組織に参加しており、イラク人であることが伺える。

新カリフに同定される有力候補はアブダッラー・カルダーシュ (‘Abdullāh Qardāsh、またはハーჯィー・アブダッラー Ḥajjī ‘Abdullāh と呼ばれる) という人物である。本名はアミール・ムハンマド・サイード・アブドゥッラフマーン・ムハンマド・マウラー (Amīr Muḥammad Sa‘īd ‘Abd al-Raḥmān Muḥammad al-Mawlā) といい、1976年にイラク北西部ニーナワー県のタルアフアルで誕生、イマーム・アアザム・カレッジ<sup>2</sup>でイスラーム法を学んだとされている。仮にこの経歴が正しいならば、クライシュ族出身であることだけでなく、イスラームに関する学識でもカリフの資格ありということになる。

そのほか、イラク戦争後にアルカイダに合流、米軍に捕らえられ、キャンプ・ブッカでバグダーディーと出会っていたとの情報もある。また、アブー・オマル・トルコマーニー (Abū ‘Umar al-Turkumānī) という名前も同一人物だとの説があり、そうすると、彼はアラブ人でなく、トルコマーン人だということになる。たしかに、タルアフアルの住民の多くはトルコマーンであり、しかも、彼の名前カルダーシュはカラダーシュ (Qaradāsh) と読めば、トルコ語で「カラ・タシュ (kara taş)」、すなわち「黒い石」とも解釈できるので、トルコマーン人説はそれなりの説得力はある。しかし、手持ちの資料からはそれ以上にトルコマーン説を補強するような材料は見つからなかった。

IS 側から新カリフに関する具体的な情報がまったく出ていないなか、カルダーシュが新カリフとして取りざたされるようになったのには理由がある。彼の名前が2019年夏ごろからインターネット上で頻繁に議論されるようになったのである。2019年8月7日に、ISの通信社とされるアアマーク通信が、バグダーディーがカルダーシュを後継者に指名したと「報道」したからだ。それ以降、次期カリフの有力候補としてさまざまな媒体が彼を話題にするようになった。しかし、このアアマーク通信の報道は明らかに偽物である。そのころ、アアマーク通信は、みずからのウェブページ、インターネットの電子掲示板、そしてテレグラム (Telegram) などのメッセージ・アプリなど、特定のチャンネルを用いて「ニュース」を配信していたのだが、このカルダーシュ後継者指名に関する「報道」は、こうした公式チャンネルを経由していなかったため、専門家の大半は、この「報道」の信憑性に疑問をもっていた。

実際、その後の、公式チャンネルを通じてのアアマーク通信の「報道」、広報部門からの声明でも、その件にはまったく触れていない。だが、アブダッラー・カルダーシュがアブー・イブラーヒームであることを否定する材料もあまりない。

なお、アブルハサン・ムハーシルに代わる、新しい公式報道官、アブー・ハムザ・クラシー (Abū Ḥamza al-Qurashī) もこの声明がお披露目となった。確認されているかぎり、アブー・ムハンマド・アドナーニー (Abū Muḥammad al-‘Adnānī)、アブルハサン・ムハーシルにつづくISの3人目の公式報道官と考えられる。この声明では、前任のムハーシルに関してイラクへ移住してきたムジャーヒドであり、預言者ムハンマドの半島の出身だとしている。ここでいう「ムハンマドの半島」とは現代のジハード主義の文脈ではサウジアラビアのことを指すので、ムハーシルがサウジ人であったことがわかる。

このアブー・ハムザ・クラシーという人物も、まったく不明であるが、クラシーとついていることから、クライシュ族出身という触れ込みになっているようだ。ただし、こちらも信憑性はわからない。あるいは、今後、アブー・イブラーヒームが殺害されたときには、彼をカリフに担ぎ出す布石とも考えられる。

#### (4) バグダーディー死後のISおよびジハード主義

バグダーディーが死んだのちも、ISのテロがなくなったわけではない。ISが毎週出している週刊戦果報告の『ナバア』誌 (al-Naba') によれば、テロの件数は死亡の前後で大きな変化はない。ただし、同誌の統計は自己申告なので、参考にしかない。自己申告とはいえ、イラクやシリアなどでは毎週、数十件のテロを行ったと自負しており、一部はビデオなどで検証することも可能である。

注目すべき点としては、11月20日以降、ホラーサーン県 (アフガニスタン) での事件がなくなっていることが挙げられる。それまでホラーサーンは、イラク・シリアといった

ISの拠点を除けば、シナイ県（エジプトのシナイ半島）、西アフリカ県（ナイジェリア）等と並んでもっとも活発に事件を起こしていたのだが、それ以降、少なくとも犯行声明を含め、沈黙してしまっている。

12月4日にアフガニスタンのジャラーラーバード近辺で日本のNGOペシャワール会の中村哲医師が殺害された。ISホラーサーン県はまさにジャラーラーバードのあるナンガルハール県を拠点としており、犯人の可能性があるとされていたが、同医師殺害に関しては現在に至るまで何もっていない。

もう一つの有力容疑者であったターリバーン（Talibān）は犯行を否定している。実は、そのターリバーンは11月17日にナンガルハールとクナルのISホラーサーン県を一掃したとの声明を出しており、それを信じるならば、ISが中村医師殺害の実行犯である可能性は低くなる（もちろん、可能性がゼロというわけではない）。

一方、他の地域をみると、アフリカでのISの活動はまったく鎮静化していない。アフリカではソマリアや西アフリカ県（ナイジェリア）のほか、マリやブルキナファソ、ニジェール、コンゴ民主共和国といったサーヘル地域では、アルカイダ系組織を含め、ジハード主義組織の活動は活発なままである。

アフリカでは、もう一点、これまでほとんど沈黙していたアルジェリアのISから、2019年11月21日にアルジェリア南部のタマンラーストでの事件について犯行声明が出たことは、注目していただろう。前回の犯行声明が2017年8月であり、2年以上のあいだISアルジェリア県は沈黙していたことになるが、この事件をきっかけにテロがふたたび活発化する恐れもある。

また、それ以外の注目地域としては、インドが挙げられる。インドではヒンドゥー民族主義政権のもと、つぎつぎと反イスラーム的（とムスリムが認識しそうな）動きがみられる。たとえば、2019年8月にインドがジャムム・カシミール州の自治権を剥奪し、直轄地にする決定をしたこともそうだし、同年12月にはインド国会が近隣諸国の宗教マイノリティーに市民権を付与する市民権改正法案を可決したこともそうだ。この新法案ではムスリムが除外されており、インド内外のムスリムから批判が出ている。

2019年5月にISがインド県・パキスタン県の設置を発表したのも、インド国内の反イスラーム的なムードを反映したものといえるかもしれない。たとえば、2019年8月22日に発行された『ナバア』第196号では、「ヒンドゥー教徒をアラビア半島から駆逐せよ」というタイトルの論説を掲載している。「～をアラビア半島から駆逐せよ」は、本来、多神教徒に対するもので、預言者ムハンマドの遺言とされている。この論説では、モディ首相のアラブ首長国連邦（United Arab Emirates: UAE）・バハレーン訪問が取り上げられており、ヒンドゥー教徒のアラビア半島支配を阻止するため、彼らと戦って殺害し、富を収奪せよとたきつけており、具体的には「政治的な重要人物、富豪、礼拝所の邪神ら」を標的にす

ること、さらに、インド国内での攻撃だけでなく、アラビア半島のムスリムたちに外国人労働者としてアラビア半島にいるヒンドゥー教徒を殺せと呼びかけられている。湾岸諸国には多数のヒンドゥー教徒の外国人労働者が居住しており、彼らの集まる場所は要注意となろう（ただし、イスラームの古典的資料では「アラビア半島」はほぼヒジャーズ地方を指しており、UAEは範囲外である）。

### (5) ジハード主義の動向

ISがイラクやシリアで領域を失った時点で、ISの勢力は衰えたとの説も流れていたが、実際にはISは統治能力を失っただけで、テロ遂行能力はある程度まで維持されてきた。それはおそらく組織のトップであるアブー・バクル・バグダーディーを失ったことでも同様であろう。指導者が殺害されたからといって急速にISのテロが激減するとは考えづらい。実際、バグダーディーの死が公表されたのちでも、ISは、イラクやシリアを中心に多数のテロの犯行声明を出している。それらすべてが事実ではないにしろ、テロ活動が完全に停止する兆候はみられない。ましてや、アルカイダなどその他のジハード主義組織まで含めれば、テロ活動は当面継続するとみるべきであろう。

ISは中央集権的な組織ではなく、イラク・シリアといった直轄統治地域以外では、地元のジハード主義組織がISに忠誠を誓って、ISの支部（ウィラーヤ）になったにすぎない。こうした地方組織では、原則的にIS中央の指示よりも独自の綱領、独自の判断で行動していたと考えられる。したがって、IS中央のトップが代わったからといって、戦略・戦術面で大きな変化があると考えべきではない。

しかも、当面は、指導者死亡を受けての報復作戦がはじまることが予想され、実際にISは12月後半から犯行声明に「2人の偉大なシェイフ、信徒の統率者アブー・バクル・クラシー・バグダーディーとアブルハサン・ムハーシル殺害に対する報復攻勢」という名前をつけ、一連のテロがバグダーディーとムハーシル報道官の死に対する報復であると位置づけたのである。バグダーディーらの死から少し時間が経過し、クリスマスが近づいた時期だったので、おそらく欧米を中心にローンウルフ型、ホームグロウン型テロが報復の名のもとに発生する可能性を期待したのかもしれない。

たとえば、2019年11月29日、英国のロンドン橋で「偽の爆発装置」を体につけ、刃物をもった男性が通行人に襲いかかり、2人が死亡する事件が発生した。警察官に射殺された犯人は、ロンドン証券取引所などを標的としたテロ計画などで2012年に禁錮8年以上の有罪判決を受けていたが、2018年12月に仮釈放されていた。事件ではISの「アマーク通信」がカリブ国兵士の犯行と報道したが、実際にISが関与していたかどうかは不明である。

また、その直後の12月6日、米フロリダのペンサコーラ海軍航空基地で発砲事件があり、3人が死亡、8人が負傷した。犯人は飛行訓練のため同基地に滞在していたサウジアラビア

出身の訓練生（サウジ空軍所属）であった。これについて IS は犯行声明を出していない。

とはいえ、バグダーディーというカリフを失ったことで、長期的には IS のリクルートなどに支障が出てくることも予想される。とくに、新指導者、アブー・イブラーヒームがまったく表に出てこないようなことがあれば、あるいはたとえ表舞台に登場したとしても、バグダーディーほどの「カリフ」としての能力に欠けていたことが判明すれば、IS の求心力は徐々に失われていくだろう。IS の看板の威力が減退すれば、長期的には活動の低下につながる。新カリフの化けの皮がはがれるようなことがあれば、組織的な弱体化が早まる可能性もある。

#### (6) おわりに

いずれにせよ、ジハード主義のテロ対策としては、組織的な解体も重要だが、同時並行的に思想的な解体も進めていく必要がある。とくに中東における IS を筆頭とするジハード主義組織の溶解がはじまっている現在、イラクやシリア等に集まっていた外国人戦闘員やその家族が自国に帰還しはじめている。彼らを、脱洗脳し、社会に再統合していくプロセスを、物理的な国境や現実世界と仮想空間の区別なく、グローバルに進めていく必要があるだろう。

ただし、こうした試みがけっしてうまくいっていないことは認めざるをえない。英国には「思いとどませ、引き離すプログラム（Desistance and Disengagement Programme）」という過激主義に染まった人たちのためのリハビリ・プログラムがある<sup>3</sup>。テロやテロ関連の活動に関与した個人のリハビリを通じて、社会全体のテロ・リスクを減少させるというもので、2003 年からはじまった対テロ戦略（Counter-Terrorism Strategy: CONTEST）の一環としてつくられたものだ。何度も改訂されているものの、上述のロンドン橋での事件の実行犯も同プログラムを受けていたとされることから、効果については疑問の声も出ている。

一方、インターネットは、ジハード主義組織にとって、自由に活動できる残された数少ない「領域」であったが、そこにも規制がおよびはじめている。ジハード主義組織が愛用するメッセージング・アプリのテレグラムは欧州刑事警察機構（Europol）との協力のもと、テロを煽動するようなボット（Bot、機械による自動発言システム）やチャンネルを摘発するプロジェクトを開始した。IS のみならず、他の過激なアカウントも軒並み削除しており、IS が機関誌の『ナバア』で言及していることから判断して、IS にとって大きな痛手となっている可能性がある。

テロ組織がインターネットを利用し、リクルートや宣伝で多大な効果をあげていることから、インターネット上の規制は急速に進んでいる。数年前までフェイスブック（Facebook）やツイッター（Twitter）などでもテロ組織が情報を多数流していたが、現在ではこれらのプラットフォームでテロ組織が情報を拡散することはほとんど不可能になっている。数少

ない野放し状態であったテレグラムでも規制が進んできたことで、ジハード主義組織の居場所は仮想空間上でも縮小していると考えられる。

アラビア語中心だったアルカイダやISの広報活動は、多言語化していたが、現在、英語など非アラビア語のメディアは、対テロ有志連合やインターネット企業側の規制強化により、ほとんどストップしている状況である。現在でもジハード主義組織の宣伝活動はインターネットが中心だが、実際には検索できない深層ウェブやダークウェブに追いやられている。しかし、そうした情報を見たいという意味と技術さえあれば、過激な情報は入手可能であり、そこから新たな過激主義者・過激思想が登場する可能性も否定できない。自由主義・民主主義における表現の自由や報道の自由とどう折り合いをつけるかが、今後の大きな課題となるであろう。

#### — 注 —

- 1 シリアにおけるアルカイダ系組織としてはヌスラ戦線 (Jabha al-Nuṣra) が有名であるが、同組織は、離合集散し、シャーム解放委員会 (Hay'a Tahrīr al-Shām) となっている。同委員会から離反したアルカイダ支持グループがフッラースッディーンとされる。なお、後者は他の組織と合流して、「ワ・ハッリド・アル・ムウミニーン作戦室」(Ghurfa al-'Amaliyāt "Wa Ḥarriḍ al-Mu'minīn") の傘下に入ったことになっている。
- 2 資料によって、彼の学んだ学校には異説がある。比較的多いのが、イマーム・アアザム・カレッジとする説とモスルの大学で学んだという説で、両方とも正しいとするなら、イマーム・アアザム・カレッジのモスル分校で学んだということになる。イマーム・アアザム・カレッジは1066年にバグダードに設立された高等教育機関で、現在はバグダード以外、イラク国内各地に支部を置いている。モスルにあるのは正確にはニーナワー分校。
- 3 詳細は英内務省のウェブページを参照 <<http://homeofficemedia.blog.gov.uk/tag/desistence-and-disengagement-programme/>> 2020年2月10日アクセス。